真の豊かさ 取り戻そう

こころを育む総合フォーラム・シンポジウム

私たち日本人は戦後の豊かさの中で「心」を見失いつつあるのでは――そんな危機感を共有する各界の有識者が集う「こころを育む総合フォーラム・シンポジウム」が7日、京都市左京区の国立京都国際会館で開かれた。山折哲雄・国際日本文化研究センター名誉教授が「こころを育むとは?」と題して基調講演し、地域に根ざした言葉やほほ笑みの大切さを指摘。パネルディスカッションでは、鷲田清一・大阪大副学長をコーディネーターに、4人のパネリストが21世紀の日本人が抱える課題や心のあり方などについて討議した。

山折哲雄氏

国際日本文化研究センター名誉教授。国立歴史民俗博物館教授、同センター所長などを歴任。専門の宗教学、思想史から、日本人の精神構造や日本の文化風土などに鋭い分析を続ける。

鷲田清一氏

大阪大副学長。関西大教授、大阪大文学部長などを歴任。専門は哲学、倫理学。「分散する理性」「モードの迷宮」など著書多数。

中村桂子氏

ＪＴ生命誌研究館長。三菱化成生命科学研究所人間・自然研究部長、早稲田大教授などを歴任。生物を総合的、歴史的に研究。

遠山敦子氏

松下教育研究財団理事長、新国立劇場運営財団理事長。文部省入省後、文化庁長官、駐トルコ大使、文部科学相などを歴任。

葛西敬之氏

東海旅客鉄道会長。鉄道マン一筋に歩み、同社取締役、社長などを歴任。政治、外交、経済の幅広い分野に見識を持つ論客。

安西祐一郎氏

慶応義塾塾長・大学長、日本私立大学連盟会長。人間の情報処理メカニズムの解明などに関する研究を続ける認知科学の第一人者。

基調講演

地域に根ざした言葉に力

心の問題は難題だ。3点に絞って申し上げたい。

おととし、「源氏物語」を京言葉で朗読したCDを耳にした時、スーツと平安時代の世界に身を浸すことができた。京言葉の持つ文化的な力を感じた。

同時に宮沢賢治の「永訣の朝」という詩を思い出した。最愛の妹が死んだ時につくった絶唱だ。共通語で呼びかける賢治に、妹が岩手県の花巻方言で応答する形で詩は進行する。

従来、シテの賢治がワキの妹に呼びかけていると解釈されてきたが、シテは妹で賢治はワキではないか。花巻方言こそがシテだと気づいた時、この詩が生き生きと眼前に浮上してきた。

「こころを育む」第1の軸は、地域の文化的伝統から紡ぎ出された言葉だ。

私は会議に出席するような時、いつごろからか呼吸を整えるようになった。受動的な気持ちになれる。何か主張しようとする時、その方が自分の言葉が相手の心によく届く、と感じる。

姿勢を正して深呼吸することは相手と通じ合うための重要な作法だ。第2の軸は呼吸の問題。人生にはいろんな門がある。門を入る時、息を深く吐くことだ。

先生と生徒、親と子、上司と部下。戦後、私たちは何事につけ横並びの人間関係が大事だと聞かされ、縦の関係、師と弟子の関係がないがしろにされてきた。

遊び戯れる良寛と子どもたちの姿の中に理想的な師弟関係の原型があるのかもしれない。そこには微笑のやりとり、優しい言葉のやりとりがあった。

第3の軸は微笑外交と言うべきもので、人間関係を最終的に律するのは、微笑の持つ特別の効用なのかもしれない。

日本社会には良寛が好んだ言葉「和顔愛語」の伝統が、まだ衰えていない。どう発展させ、精神的遺産とするか。それが課題だ。

耐えることが大事　中村氏

大人にも問題あり　鷲田氏

静かな自信持って　安西氏

武士の心忘れるな　葛西氏

品格ある生き方を　遠山氏

鷲田　私たちは「こころを育む」とはどういうことかを考え、議論を重ねてきた。慎まねばならないのは「昔の子どもはこうだった」という大人の夢を子どもに投影して嘆くこと。子どもの世界に危機の兆候があるとしたら、それは大人の問題だ。討論の最初に現在の子どもたちや教育の状況について感想を。

安西　最近の若い人たちは人と話ができず、自分の気持ちをなかなか伝えることができないように思う。子どもは大人の鏡。大人の心をどうやって育んでいったらいいのか、自分のこととして取り組みたい。

葛西　新入社員の教育を見ると、非常に素直で、いい環境ですくすく育ってきたと感じるが、強い意欲を感じさせない。いい点を伸ばし、弱い点を強くしていければ。

遠山　文部科学大臣として教育改革に取り組んだが、心の問題だけは十分に対応できなかった。非常に心を痛めながら、どうしたものかと考えている。

中村　生物学の立場からすると、人間はここ数万年何も変わっていないのに、私たちの社会は人間らしく生きるのに合わないところをいっぱいつくってしまった。一生懸命、生きてきたけれど、つらいことになった、というのが実感。

鷲田　21世紀の日本社会が抱える問題とは。

中村　科学技術が非常に進んだのが20世紀。とても便利になったが、何でも思い通りになるという考えが強まり、謙虚さを失った。生きることは時間を紡ぐことなのに、誰かのために自分の時間を使うことがやりにくくなった。

遠山　豊かになるという目標が達成され、大人の一部や子どもたちが目標や意欲を失った。人と人との関係が希薄になった。高度情報化社会とどう対峙するかという問題もある。

葛西　一番の問題は20世紀後半、日本人が自己喪失状態になったこと。敗戦後、価値観が混乱し、アメリカの保護の下、自分の頭で考え、決断し、行動しないまま、冷戦という温室の中で育ってしまった。

安西　日本は国土が美しく、歴史や洗練された文化がある。不況とはいえ経済大国だ。傲慢ではいけないが、もっと自信を持っていい。静かな自信を持って、老若男女が活躍できる社会を目指すべきだ。

遠山　福沢諭吉は子どもたちに「むさぼるなかれ」と教えた。足るを知るという、人間としての品格を思い直す必要がある。新たなルールや価値観を構築するのと同時に、失ってはならない価値もある。

葛西　価値があるとされてきたものが20世紀後半、逆さまになった。質素や勤勉は美徳だが、今は消費が足りず、働き過ぎと言う。元の価値に戻さないと、だめなのではないか。

鷲田　次に「こころ」とは何か、どう育めばいいかを話し合いたい。

安西　若い時から多くの人と会って尊敬できる人に巡り合うことだ。学校と家庭、地域の役割を見直す必要がある。社会の一員として幸福な生活を営むには、勉強すること、鍛えられることが必要。学校はきちんと責任を持つべきだ。

葛西　日本人は優しい心を持っているが、忘れてしまったものがある。武士の心だ。命を捨てる覚悟で事に対処することと、自分の利益より周辺の人の利益を優先する自己犠牲の両方を教えるべきだ。

遠山　自分が他者に何ができるかを考えていく必要がある。大臣時代の最後に居場所づくりに取り組んだ。東京都葛飾区の小学校では、放課後、地域の人が学校に来て子どもたちを見守っていた。こうしたことが各地で起きれば。

中村　「耐える」ことが大事だ。20世紀、私たちは何にでも答えを出してきたが、今は複雑なことに向き合わねばならない。すぐに答えが出ない時、一生懸命何かを探しながら考え続けることが大事。答えを出す人が偉いという価値観を変えねばならない。

鷲田　最後に一言ずつ。

中村　最近、テレビが壊れ、色が出なくなった。少しして色が出た時、ものすごく美しく見えた。今、みんな子どもに何でも与えようとするが、不足することの楽しみもある。

遠山　国家も個人も本当に品格のある生き方が求められている。よりよく生きることに意欲を持ち続けることだ。

葛西　心のしなやかさは、いい仲間との付き合いのような、人間同士の直接の関係からしか出てこない。小中高校の時期に、そういう場を増やしてあげられる教育システムをつくって効率的に基礎をたたき込むことが一番だ。

安西　子どもたちに世界のどこでも独立して生きていくだけの心と力とともに、お互いの利害得失を乗り越えて協力して生きていくことを学んでほしい。

鷲田　最初に大人の側の問題と言ったが、4人には自分の問題として語っていただけた。これからも議論を続け、最終報告が出せる時がきたら、もう一度こういう機会を持ちたい。

＜主催＞国際日本文化研究センター、松下教育研究財団

＊

「こころを育む総合フォーラム」は今年4月、遠山敦子・元文部科学相を発起人に16人で発足。来春、提言を国民に訴える予定。これまでの討議をホームページ（http://www.kokoro-forum.jp/）で紹介している。